広島大学教育学部紀要　第一部（心理学）　第42号　1993

単語の内包的意味に及ぼす表記形態と表記頻度の影響

廣　瀬　　等

（1993年9月10日受理）

The effects of script type and script frequency on connotative meanings of Japanese words

Hitoshi Hirose

This study investigated the effects of script type and script frequency on connective meanings of Japanese words. In a previous study (Sugishima & Kashu, 1992), using semantic differential method, it was suggested that the words that were same concept but different script type had different connotative meanings. And the effects of script type and script frequency were pointed out. This study examined each of these effects on connotative meanings and its interaction in detail. In this study, semantic distances of each condition from concepts presented by voice were discussed. The results indicated that connotative meanings of *kana* script or high frequency script were more similar to connotative meanings of voice. As for interaction, it was suggested that script type factor and script frequency factor had same amount of effect on connotative meanings.

Key words：connotative meaning, script type, script frequency, *kanji*, *kana*, semantic differential method.

日本語における文字の認知を考える場合，漢字，ひらがな，カタカナという3つの表記形態の存在を考慮する必要がある。これまでに行われてきた研究では，漢字，ひらがな，カタカナという3種類の文字がそれぞれどのように認知されているかが問題とされ，検討が行われてきた。

初期の研究では，例えば，松原・小林（1967）や海保（1968，1970）において，ひらがなやカタカナの見やすさに関する検討がなされている。また，海保(1975)では，情報処理理論に基づき，漢字の認知過程が検討された。そして，これ以後の多くの研究では，文字の認知を形態，音韻，意味の3つの処理の関連としてとらえ，実験が重ねられている（漢字の認知に関する一連の研究は，海保・野村（1983）に詳しい)。さらに，個々の表記のみを実験の対象とするのではなく，表記間の関係を明らかにすることにより，各表記の処理を検討した研究もある（齋藤，1981；野村，1981など)。例えば，齋藤（1981）は，漢字とひらがな表記の読みにおける処理過程の違いを検討しており，実験の結果，漢字は直接的に語彙記憶に接近する（意味がわかる）のに対し，ひらがなは音韻を経て語彙記憶に接近することが示されている。

一方，広瀬（1984）は，語がカタカナで表記されることが多いのか，それとも漢字表記されることが多いのかという表記頻度（表記形態の相対的な頻度）に着目した。実験ではカテゴリー判断課題により，低頻度のカタカナ表記語（例：スイエイ）と高頻度のカタカナ表記語（例：テニス）を用いて漢字表記語（例：野球）との語の意味への接近過程が比較された。実験の結果，高頻度のカタカナ表記語と漢字表記語の反応時間が同程度であることが示され，語の意味への接近に関して表記頻度が重要な役割を果たしていることが示唆された。そして，この結果から，過去の研究で用いられた仮名表記語と漢字表記語の間の反応時間の差が，表記頻度の差も反映しているのではないかと考察している。

この問題に対する基礎的な資料を提供するために，浮田・皆川・杉島・賀集（1991a）は，119個の日常物品名について，漢字・ひらがな・カタカナの主観的表記頻度と表記の適切性の調査を行っている。調査の結果は，3種類それぞれの表記の頻度により，並立型，漢字型，ひらがな優位型など11種類に分類された。さらに，浮田・皆川・杉島・賀集（1991b）では，この結果を材料選択の基準として採用し，語彙判断課題を用いて，漢字型とひらがな型の語が認知過程に及ぼす影響を検討している。実験では，同じひらがな表記の語であっても，ひらがな型の語（例：うちわ）の方が漢字型の語（例：てがみ）よりはやく認知される結果が示され，広瀬（1984；1985）と同様，語の認知において主観的出現頻度の影響が示唆された。

ところで，これまで行われてきた研究では，漢字や仮名という表記形態の違いによる処理の違いに着目し，その認知過程を明らかにすることに主眼が置かれてきたといえる。杉島・賀集（1992）は，これらの研究が読みが同じ語であれば表記形態が異なっていても全く同じ意味内容をもつことを前提としていることを指摘した上で，SD法（semantic differential method）を用いて表記の違いが内包的意味（connotative meaning）に及ぼす影響について検討を行った。SD法とは，もともと言語の意味の測定法として開発され，その後，広い範囲にわたる事象に対する意味あるいはイメージを測定する方法として用いられている（井上・小林，1985）ものであり，内包的意味とは，辞書に定義される意味ではなく，定義されないが何となくそれを感じるような直感的・感情的な意味あるいは印象（芳賀，1988）である。杉島・賀集（1992）では，SD法において概念（concept）と総称される評定の対象物として，漢字，ひらがな，カタカナが用いられ，表記頻度の影響についても併せて検討している。評定された結果は，意味プロフィール（semantic profile），Dスコア（distance score）などの観点から比較され，同一項目であっても表記形態が異なる（例：時計／とけい／トケイ）と，語のもつ内包的意味が異なることが示唆された。そして，その原因としては，表記形態に固有な視覚的特徴と表記頻度の影響が指摘されている。

さて，杉島・賀集（1992）では，表記形態が異なると語のもつ内包的意味が異なることが示唆され，また，その原因として表記形態と表記頻度の影響が指摘された。しかし，表記形態と表記頻度が互いにどのように関連しているのかという，表記形態と表記頻度の交互作用については検討されておらず，交互作用に関するより詳細な検討も必要であると思われる。そこで，本研究では表記形態と表記頻度の影響とともに，その交互作用についても細かく検討することにする。実験では，表記形態の影響を受けないと考えられる音韻で概念を呈示する事態を新たに加え，各表記形態で示された概念との内包的意味の違いから考察を行う。なお，杉島・賀集（1992）では，表記形態として「漢字，ひらがな，カタカナ」を用い，表記頻度を示す表記型として「漢字型，ひらがな型，カタカナ型」が用いられたが，カタカナ型は標準化された材料が少ないため，本研究ではカタカナは材料として使用せず，漢字とひらがなのみを材料として用いる（本研究では，これ以後，「ひらがな」を単に「仮名」と表記することにする）。

方　　法

被験者　女子大学生210名が被験者であった。

実験計画　2×2の要因計画であった。第1の要因は表記の形態に関するものであり，漢字表記と仮名表記の2条件であった。また，第2の要因は表記の型に関するものであり，漢字型と仮名型の2条件であった。なお，いずれの要因も被験者内要因とした。

材　料　本研究でSD法に使用する評定概念は，浮田他（1991a）により，主観的出現頻度の分類型が漢字型のもの，ひらがな型のものをそれぞれ5項目選出した。漢字型とは，漢字・ひらがな・カタカナのうち，日頃の生活において漢字で書かれたものをよく見る頻度が70％以上であり，ひらがな・カタカナで書かれたものをよく見る頻度がともに50％以下と評定されたものであった。また，ひらがな型とは，同様に，ひらがなの主観的出現頻度が70％以上，漢字・カタカナの主観的出現頻度がともに50％以下と評定されたものであった。本研究では，漢字型として，「切手，本，時計，灰皿，指輪」が選出され，仮名型として，「わりばし，ふとん，ひも，くし，ものさし」が選出された。このため，漢字表記では，「切手，本，時計，灰皿，指輪，割箸，蒲団，紐，櫛，物差」が材料として使用され，仮名表記では「きって，ほん，とけい，はいざら，ゆびわ，わりばし，ふとん，ひも，くし，ものさし」が材料として使用された。

次に，SD法に使用する評定尺度の形容詞対としては，杉島・賀集（1992）で用いられた15形容詞対が用いられた。この研究では，Osgood，Suci，& Tannenbaum（1957）が示した意味の3空間次元（評価性次元，力量性次元，活動性次元）を表すものとして，森本（1987）で用いられた次の形容詞対を選定している。まず，評価性次元として，「気持ちのよい－気持ちの悪い」，「きれい－きたない」，「悪い－よい」，「たよりない－たのもしい」，「好きな－きらいな」の5形容詞対，

力量性次元として，「小さい－大きい」，「かたい－やわらかい」，「男性的－女性的」の３形容詞対，そして，活動性次元として，「浅い－深い」，「はやい－おそい」，「しずかな－うるさい」の３形容詞対である。さらに，杉島・賀集（1992）は，以上の形容詞対に加えて，海保・犬飼（1982）で用いられた漢字の形態尺度のうち，「複雑な－単純な」，「ばらばらな－まとまった」，「丸まった－角ばった」，「安定な－不安定な」の４形容詞対を含め，合計15の形容詞対を評定尺度として用いた。すべての尺度は，井上・小林（1985）でSD法で用いるのに妥当であるとされたものであった。そして，本研究でも以上の15形容詞対を評定尺度として用いた。

評定用紙は以上の材料を使用し，杉島・賀集（1992）を参考にして作成された。評定用紙はＢ５判の大きさで，35ページであった。具体的には，まず，教示の書かれた表紙があり，評定の練習のための用紙があった。そして，本実験が始まることを示す用紙，最初の表記形態についての評定用紙が10ページ，表記形態が変わることを示す用紙をはさんで次の表記形態についての評定用紙10ページが続いた。さらに，音韻呈示による評定に変わることを示す用紙，その評定用紙が10ページの順で構成されていた。評定用紙は１つの概念ごとに１ページを使い，用紙の上部中央に横書きで評定の対象となる概念が印刷され，その下に７段階の評定尺度からなる15対の形容詞対が横書きで印刷されていた。ただし，音韻呈示による評定のための評定用紙では，概念の代わりに呈示番号（１～10）が印刷されていた。漢字表記の概念に関しては，被験者が正しく読めない場合を考慮し，用紙の右下隅に注として片仮名で漢字の読みを印刷した。漢字と仮名の表記形態の呈示順序は被験者間でカウンターバランスされ，各表記内の概念の呈示順序は無作為化された。

評定用紙は，Cannon製プリンター（BJ-10v select）により印刷され，印刷には同プリンターが内蔵する明朝体フォントが用いられた。評定の対象となる概念を示す文字は４倍角文字（約７㎜×約７㎜）で印刷され，その他の文字は全角文字（約3.5㎜×約3.5㎜）で印刷された。

手続き　実験では，まず各被験者に冊子を配布し，冊子の表紙に書かれた教示文を読むことにより説明を行った。教示では，杉島・賀集（1992）を参考にし，１）同じ物事が漢字，仮名で書かれているのを目にした時，または，耳で言葉として聞いた時，人はどのような印象を受けるかを調べることが目的であること，２）漢字や仮名で書かれた物事や，耳で言葉として聞いた物事があなたにとってどのような意味をもつのかを考えること，３）冊子の各ページの上部に，判断の対象となる物事が記されており，その下に印刷された形容詞を両端に付けた15個の尺度について「この程度である」と思われる軸の上に「○」を記入することによって，その意味を表現すること，４）冊子は10ページごとに３つのブロックに分かれ，ブロックごとに10種類の同じ物事名が出てくること，５）第１・第２ブロックの「漢字や仮名で書かれた物事についての判断」は各自のペースで進めてもらい，第３ブロックの「耳で言葉として聞いた物事についての判断」に関しては後で一斉に行うこと，６）判断はそれぞれ別個に行い，前にやったところを見直したり，先の方を見たりしないこと，７）直感的な感じで答えること，が示されていた。

被験者全員が第１・第２ブロックの評定を完了したことを確認した後(約20分後)，一斉に第３ブロックが行われた。評定を求める各概念は，「１番です。１番は『ほん』です。『ほん』という言葉について判断してください」というような形式で実験者により示された。各概念の呈示順序は「ほん，わりばし，ものさし，きって，ひも，とけい，はいざら，くし，ゆびわ，ふとん」であった。評定の制限時間については，あらかじめ示されることはなく，概念の呈示から１分程経過した時点で，実験者が全員の評定が完了したか否かの最初の確認を行い，その後，全員の評定の完了が確認されしだい，次の概念の呈示へと進められた。

結　　果

被験者210名中の７名に一部の評定対象を評定して

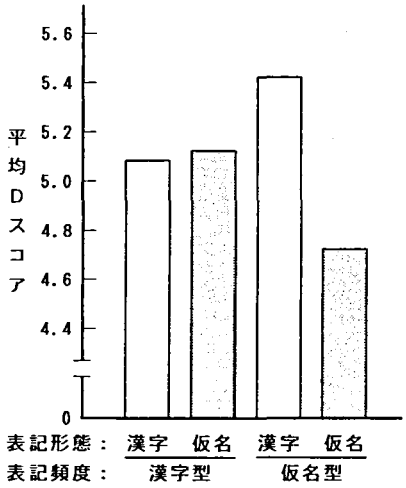

図１　各条件における平均Ｄスコア
（音韻呈示による概念との意味距離）

いない不備が認められたので，分析の対象から除外し，被験者203名を以下の分析の対象とした。

7段階尺度の左端から順に1点から7点を配した上で，漢字表記，仮名表記における各概念と，音韻呈示による各概念間の意味距離を表すDスコアを被験者ごとに算出し，続いて，被験者ごとに，漢字表記，仮名表記での漢字型と仮名型における平均Dスコアをそれぞれ算出した（各概念における各項目の平均意味得点（average semantic scores）については付録を参照)。被験者全体での各条件の平均Dスコア(音韻呈示による各概念との間の意味距離）を図1に示す。

平均Dスコアに対する2×2の分散分析の結果，表記の形態の主効果［$F(1,202)=22.30$，$p<.001$］が有意であった。しかし，表記の型の主効果［$F(1,202)=0.80$］は認められなかった。つまり，漢字表記に比べて，仮名表記による概念と音韻呈示による概念間の意味距離が短いことが示され，一方，表記の型の違いによる意味距離の差は認められなかったといえる。

さらに，交互作用［$F(1,202)=62.92$，$p<.001$］が有意であったので，単純主効果の検定を行った結果，漢字表記における表記の型の効果［$F(1,404)=26.31$，$p<.001$］，および，仮名表記における表記の型の効果［$F(1,404)=30.34$，$p<.001$］がそれぞれ有意であった。また，仮名型における表記の形態の効果［$F(1,404)=69.65$，$p<.001$］も有意であった。ただし，漢字型における表記の形態の効果［$F(1,404)=0.26$］は有意でなかった。これらの結果から，漢字表記の概念では，仮名型に比べ漢字型の概念において音韻呈示による概念との意味距離が短いことが示され，また，仮名表記の概念では，漢字型に比べ仮名型の概念において音韻呈示による概念との意味距離が短いことが示されたといえる。さらに，仮名型の概念では，漢字表記に比べ仮名表記において音韻呈示による概念との意味距離が短いことが示されたが，漢字型の概念では，表記の形態の違いによる音韻呈示による概念との意味距離の差は認められなかったといえる。

考　　察

実験の結果，まず，漢字表記に比べて，仮名表記による概念と音韻呈示による概念間の意味距離が短いことが示された。Flavell (1961) は，具象名詞対における「Dスコア」と「意味の類似性」との間に高い相関（$r=.79$）を見いだしている。このような観点からも考察を加えると，漢字で書かれた概念に比べ，仮名で書かれた概念を見た方が，耳で言葉として聞いた概念との内包的意味が近かったことを示しており，漢字に比べ仮名の方が，音韻で示された概念に似た内包的意味をもつと考えられる。仮名は音韻を表す文字として機能しており文字自体の影響が少なく，一方，漢字は1字1字に意味をもつことから文字自体の影響が大きいため，仮名では音韻で示された概念に近い意味をもち，漢字では音韻で示された概念と比較的に異なった意味内容になったとも考えられる。

次に，漢字表記の概念では，仮名型に比べ漢字型の概念において音韻呈示による概念との意味距離が短いことが示された。この結果は，漢字で書かれた概念を見る場合，日頃の生活において漢字で書かれたものをよく見る頻度が高い概念の方が，耳で言葉として聞いた概念との内包的意味が近かったことを示しており，漢字表記では，漢字でよく見る概念の方が，音韻で示された概念に似た内包的意味をもつと考えられる。一方，仮名表記の概念では，漢字型に比べ仮名型の概念において音韻呈示による概念との意味距離が短いことが示されている。これは，仮名で書かれた概念を見る場合，日頃の生活において仮名で書かれたものをよく見る頻度が高い概念の方が，耳で言葉として聞いた概念との内包的意味が近かったことを示しており，仮名表記では，仮名でよく見る概念の方が，音韻で示された概念に似た内包的意味をもつと考えられる。これらの結果は，表記の主観的出現頻度が文字の内包的意味に深く関わっていることを示したものである。これまでの研究では，単語の認知過程において表記の主観的出現頻度が重要な役割を果たしていることが見いだされてきた（広瀬，1984；浮田他，1991b)。本研究の結果は，杉島・賀集（1992）に加えて，表記の主観的出現頻度が単語の意味自体にも影響を与えている可能性を示しており，今後，この点も考慮に入れて単語の認知過程における主観的出現頻度の影響を検討する必要があると考えられる。

さらに，仮名型の概念では，漢字表記に比べ仮名表記において音韻呈示による概念との意味距離が短いことが示され，漢字型の概念では，表記の形態の違いによる音韻呈示による概念との意味距離の差は認められなかった。この結果は，日頃の生活において仮名で書かれたものをよく見る頻度が高い概念では，仮名で書かれた概念の方が，耳で言葉として聞いた概念との内包的意味が近かったことを示しており，仮名でよく見る概念では，仮名表記の方が音韻で示された概念に似た内包的意味をもつと考えられる。一方，日頃の生活において漢字で書かれたものをよく見る頻度が高い概念では，漢字と仮名の違いによる音韻との内包的意味の近さの差は認められなかったといえる。そして，これらの結果は，音韻呈示による概念の内包的意味に接近するためには，表記形態と表記頻度（表記型）とい

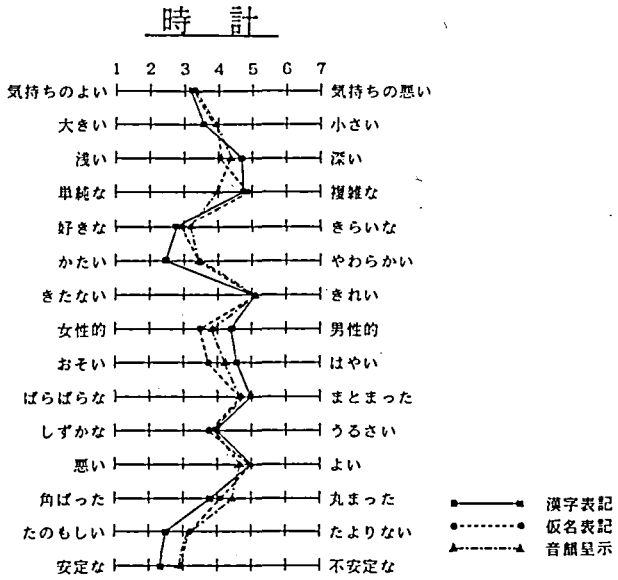

図2　漢字型概念の意味プロフィールの例

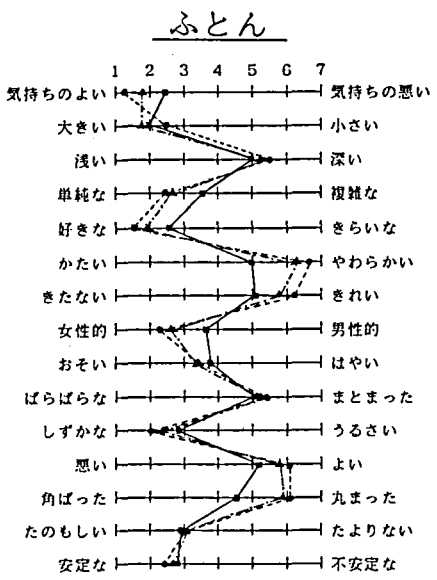

図3　仮名型概念の意味プロフィールの例

う2つの要因が同じ程度に重要であることを示すものであったと考えられる。すなわち，「仮名型・仮名表記」条件の場合は，表記形態と表記頻度がともに有利な条件となり，音韻呈示による概念の意味と最も接近したのに対し，「仮名型・漢字表記」条件では，表記形態と表記頻度がともに不利な条件となり，音韻呈示による概念の意味と最も離れる結果となった。そして，「漢字型・仮名表記」条件の場合は，表記形態は有利な条件だが表記頻度が不利な条件であるため，一方，「漢字型・漢字表記」条件の場合は，表記頻度は有利な条件だが表記形態は不利な条件となるため，音韻呈示による概念の意味から同じ程度に離れる結果となり，さらに，その意味距離は「仮名型・仮名表記」条件と「仮名型・漢字表記」条件との間に位置することになったと考えられる。

最後に，漢字型と仮名型の各概念における漢字表記，仮名表記，音韻呈示の概念の各意味プロフィールの結果からも考察を加えてみたい。図2，図3には，漢字型の概念（時計）と仮名型の概念（ふとん）における漢字表記，仮名表記，音韻呈示の各意味プロフィールの例を示す（例以外の概念については，付録を参照）。各意味プロフィールの結果からは，表記の型の違いにより異なったパターンが認められた。具体的には，仮名型においては音韻呈示と仮名表記による概念の意味プロフィールが接近して同様なパターンを示し，漢字表記による概念の意味プロフィールのみが異なったパターンが認められるのに対し，漢字型では全体的には似たような意味プロフィールを示しながら，音韻呈示，仮名表記，音韻呈示の概念の各意味プロフィール間にいくらかの距離があり，また，音韻呈示の概念の意味プロフィールが他の2つの意味プロフィールに挟まれて存在していることが多いという特徴が認められた。これらの結果は，意味プロフィールのパターンという観点からも，前述の考察と同様なことがいえるという結果であると考えられる。なお，漢字型における仮名表記と漢字表記は，同様な平均Dスコアであったが，意味プロフィールは重なるものではなく，同じ意味内容ではなかったことが示されたといえる。

要　　約

杉島・賀集（1992）では，表記形態が異なると語のもつ内包的意味が異なることが示唆され，その原因として表記形態と表記頻度の影響が指摘された。そこで，本研究では表記形態と表記頻度の影響とともに，その交互作用についても細かく検討した。実験では，表記形態の影響を受けない音韻で概念を呈示する事態を新たに加え，各表記形態で示された概念との内包的意味の違いの差から考察を行った。実験の結果，1）全体的に漢字に比べ仮名表記の概念の方が音韻で示された概念に近い内包的意味をもつこと，2）漢字・仮名表記のどちらにおいても，日頃の生活においてよく見る表記で書かれた概念に該当する場合には，音韻で示された概念に近い内包的意味をもつこと，3）仮名でよく見る概念では，漢字に比べ仮名表記の方が音韻で示

された概念に近い内包的意味をもつが，漢字でよく見る頻度が高い概念では，漢字と仮名という表記の違いによる差は認められないこと，が示された。そして，これらの結果から，音韻呈示による概念の内包的意味に接近するためには，仮名表記であるという表記形態と，よく見る文字であるという表記頻度が重要であり，さらに，この２つの要因が同じ程度に重要であることが考察された。

引用文献

Flavell, J.H. 1961 Meaning and meaning similarity: II. The semantic differential and co-occurrence as predictors of judged similarity in meaning. *Journal of General Psychology*, 64, 321-335.

芳賀　純　1988　言語心理学入門　有斐閣

広瀬雄彦　1984　漢字および仮名単語の意味的処理に及ぼす表記頻度の効果　心理学研究，55，173-176.

広瀬雄彦　1985　単語の認知に及ぼす表記の親近性の効果　心理学研究，56，44-47.

井上正明・小林利宣　1985　日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観　教育心理学研究，33，253-260.

海保博之　1968　片仮名文字の見易さの規定要因－重回帰分析による検討－　心理学研究，39，13-20.

海保博之　1970　片仮名文字相互間の類似性判断次元と見易さの関係　心理学研究，40，337-340.

海保博之　1975　漢字意味情報抽出過程　徳島大学学芸紀要，24，1-7.

海保博之・犬飼幸男　1982　教育漢字の概形特徴の心理学的分析　心理学研究，53，257-260.

海保博之・野村幸正　1983　漢字情報処理の心理学　教育出版

松原達哉・小林芳郎　1967　かな文字の見やすさに関する研究　心理学研究，37，359-363.

森本　博　1987　Semantic Differntial法による漢字の分析－(8)－　神戸山手女子短期大学紀要，30，41-55.

野村幸正　1981　漢字，仮名表記語の情報処理－読みに及ぼすデータ推進型処理と概念推進型処理の効果－　心理学研究，51，327-334.

Osgood, C.E., Suci, G.J., & Tannenbaum, P.H. 1957 *The measurement of meaning*. University of Illinois Press. Urbana.

齋藤洋典　1981　漢字と仮名の読みにおける形態的符号化及び音韻的符号化の検討　心理学研究，52，266-273.

杉島一郎・賀集　寛　1992　日本語における表記形態が単語の内包的意味に及ぼす影響　人文論究（関西学院大学），41，15-30.

浮田　潤・皆川直凡・杉島一郎・賀集　寛　1991a　日常物品名の表記形態に関する研究－各表記の主観的出現頻度と適切性についての評定－　人文論究（関西学院大学），40，11-26.

浮田　潤・皆川直凡・杉島一郎・賀集　寛　1991b　日常物品名の表記形態に関する研究(4)－ひらがな文字列の語彙判断課題に及ぼす表記型の効果－　日本心理学会第55回大会発表論文集，383.

（指導教官：羽生義正）

謝辞　本実験に御協力いただきました広島女学院大学桐木建始助教授，および学生の皆様に厚く感謝いたします。

付録：各概念における各項目の平均意味得点

(1)　**仮名表記**

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
きって	3.7	5.5	3.2	2.6	3.1	5.1	5.0	3.2	4.0	4.0	3.3	4.8	3.6	4.0	3.5
ほん	2.9	3.5	4.6	3.9	2.5	3.9	5.0	3.0	3.4	4.8	2.6	5.6	3.8	3.3	3.1
とけい	3.3	3.9	4.1	3.9	2.9	3.4	5.1	3.5	3.8	4.7	3.8	5.0	5.1	3.2	2.9
はいざら	5.4	4.5	3.4	2.7	5.4	2.9	2.4	5.7	4.0	3.8	4.4	2.6	4.4	4.2	4.1
ゆびわ	2.8	4.8	4.5	3.7	2.3	3.4	5.9	1.8	3.8	4.8	3.1	5.4	5.5	4.1	3.6
わりばし	3.6	4.7	3.5	2.4	3.7	3.2	4.7	3.7	4.1	3.9	3.8	4.3	3.0	3.9	3.9
ふとん	1.3	1.6	5.5	2.5	1.6	6.7	6.2	2.3	3.5	5.4	2.0	6.1	6.1	3.1	2.5
ひも	4.0	4.4	3.7	2.7	3.8	5.4	4.3	3.4	3.8	4.5	3.4	4.3	5.4	4.4	4.3
くし	2.9	4.5	3.7	3.0	3.0	3.6	4.7	2.1	4.0	4.6	3.1	5.0	4.1	3.8	3.6
ものさし	3.5	4.4	3.5	2.6	3.5	3.0	4.5	4.2	4.1	5.0	3.4	4.8	3.1	3.3	2.8

(2) 漢字表記

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
切手	3.2	5.8	3.6	3.3	2.9	4.5	5.1	3.7	4.6	4.4	3.2	5.2	2.6	3.4	3.1
本	2.9	3.7	5.6	5.6	2.9	2.6	4.8	3.9	3.9	5.4	2.2	5.6	2.3	2.3	2.4
時計	3.2	3.6	4.7	4.8	2.8	2.5	5.1	4.4	4.6	5.0	3.9	5.0	3.8	2.5	2.3
灰皿	5.7	4.4	3.4	3.1	5.8	1.9	2.0	6.2	4.2	4.1	4.4	2.3	3.7	4.0	3.9
指輪	2.6	4.8	5.0	4.7	2.2	2.1	6.0	2.0	4.0	5.0	3.0	5.5	4.5	3.1	2.9
割箸	3.6	4.5	4.0	3.5	3.9	2.3	4.7	4.3	4.3	4.4	3.8	4.2	2.2	3.5	3.7
蒲団	2.5	2.0	5.0	3.6	2.6	5.0	5.1	3.7	3.8	5.1	2.8	5.2	4.6	2.9	2.8
紐	4.1	4.2	4.1	4.0	4.1	4.0	4.2	4.3	4.2	4.9	3.4	4.4	4.4	3.5	3.6
櫛	3.2	4.6	4.2	3.9	3.3	2.4	4.6	2.5	4.1	4.9	3.1	5.0	3.0	3.4	3.4
物差	4.0	4.0	3.8	3.4	4.2	2.0	4.3	4.9	4.5	5.1	3.5	4.5	1.9	2.9	2.7

(3) 音韻呈示

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
KITTE	3.4	5.3	3.4	2.9	3.2	4.4	4.9	3.6	4.4	4.2	3.3	4.7	3.4	3.8	3.5
HON	3.0	3.9	4.6	4.2	3.0	3.7	4.8	3.6	3.7	5.1	2.8	5.3	3.8	3.3	3.0
TOKEI	3.3	3.9	4.3	4.0	3.2	3.4	5.0	3.8	4.2	4.7	3.8	4.7	4.4	3.2	2.9
HAIZARA	5.6	4.5	3.7	3.1	5.6	2.7	2.1	5.9	3.9	3.7	4.7	2.4	3.7	4.2	4.4
YUBIWA	2.9	4.5	4.5	4.0	2.5	3.2	5.7	2.0	3.9	4.6	3.2	5.3	4.9	3.6	3.2
WARIBASHI	4.1	4.6	3.5	2.9	4.0	3.0	4.2	4.1	4.1	3.7	3.9	4.0	3.0	4.0	4.1
FUTON	1.8	1.8	5.3	2.6	1.9	6.3	5.8	2.6	3.4	5.2	2.3	5.8	5.9	3.1	2.7
HIMO	4.6	4.5	3.5	3.2	4.5	5.0	3.7	4.1	3.9	4.0	3.8	3.8	4.9	4.7	4.7
KUSHI	3.4	4.8	3.7	3.0	3.3	3.3	4.4	2.4	4.0	4.5	3.3	4.7	3.7	3.9	3.8
MONOSASHI	3.6	4.4	3.5	2.9	3.7	3.3	4.4	4.1	4.1	4.8	3.4	4.7	3.1	3.4	3.2

注) 表の中で横軸に示された番号は，以下の形容詞対を示す。
(1)気持ちのよい－気持ちの悪い　(2)大きい－小さい　(3)浅い－深い　(4)単純な－複雑な　(5)好きな－きらいな
(6)かたい－やわらかい　(7)きたない－きれい　(8)女性的－男性的　(9)おそい－はやい　(10)ばらばらな－まとまった
(11)しずかな－うるさい　(12)悪い－よい　(13)角ばった－丸まった　(14)たのもしい－たよりない　(15)安定な－不安定な